

# 報告1：中国分野シンポジウム 「文化的制度としての中国古典」開催報告

平田 昌司

京都大学大学院文学研究科 教授

上記シンポジウムは、2000年7月15日～16日の両日にわたって京大会館（京都市左京区吉田河原町）101号室で開催され、国内外から140名の参加者があった。海外からは、発表者のほか、オブザーバーとして香港城市大学教授鄭培凱氏、中央研究院中国文哲研究所助理研究員劉苑如氏が参加された。全体の日程と各講演・報告の概要は下記のとおりである。

第1日（7月15日）は、午後2時15分に、(1)張少康氏（北京大學中文系教授）による講演「古典と現代：『現世からは新奇な発想を、過去からは創造の鏡を劉勰の“通変”論から説きおこして』」をもって始まった。世界文明にとっての宝庫である中国古典文化が現代にとっていかなる意義を有するか、「古」と「今」、「古典」と「現代」の問題が中国では漢代以来ずっと意識されていること、文化や社会の発展を考えるにあたっては、4～5世紀の文化思想家・文学理論家劉勰の著作『文心雕龍』通変篇のことは「今を望んで奇を制し、古を参して法を定む（現世からは新奇な発想を、過去からは創造の鏡を）」〔興膳宏訳〕が重要な意義を有する命題となりうることを、20世紀後半の中国大陸におけるさまざまな状況を例に挙げつつ、力をこめて論じられたものである。講演の司会・講師紹介には釜谷武志氏（神戸大学文学部教授）が、日本語への通訳には木津祐子氏（京都大学文学研究科助教授）があたりされた。つづく(2)興膳宏氏（京都大学名誉教授）の講演「古と今の出会い」は、作者の意図どおりに作品が理解されることの困難さを説いた『文心雕龍』知音篇の記述を冒頭に紹介したのち、陶淵明と蕭統、陶淵明と白居易、白居易と菅原道真、陽城と北条霞亭と森鷗外、という四つの組み合わせを通して、自らの価値観による先人の文学の裁断、創作をとおした敬愛する先人との自己同一化、新しい可能性を開拓するモデル

としての先人、作品の模倣を通して浮き彫りにされる個性の違い、読解作業が当初の意図を達成できずに終わった過程、など作品受容にあたっての諸相を提示、「古と今との関係は、一定の既知の結論の上に立ったものではなく」、「問題意識のあり方いかんによって、古は常に今と対話し、現代に再生しうる機縁を見出すことができる」ことを説かれた。司会・講師紹介は川合康三氏（京都大学文学研究科教授）が、中国語への通訳は錢鷗氏（同志社大学言語文化教育研究センター助教授）が、それぞれ担当された。

講演終了後、引きつづいて**第一部「古典の形成と伝播」**〔司会 平田〕の報告・討論に入った。このセッションは、古代の書物がいかに形成され、どのようにして「古典」としての地位を確立し、流布するに至るかの経緯を検討しようという試みである。(3)小南一郎氏（京都大学人文科学研究所教授）「中国古典形成の第一期と第二期 周宣王の評価を中心にして」は、西周の宣王に対する評価が『詩経』と『国語』で全く異なることに着目し、両文献が異なる時代の価値観を背景として形成されていることを論じ、大きな社会変動や危機に直面し伝統的価値観の結晶化がはかられるときに古典となる書物が作られることを説かれた。(4)林梅村氏（北京大學考古学系教授）「ニヤ漢簡綜考 あわせて漢文化の西域における最初期の伝播について」は、スタイン収集写本の未公刊部分に含まれていたニヤ出土漢簡39点の新しい釈文、これらを西漢期資料群・新莽期資料群・東漢期資料群に区別した上での各群の特徴指摘、を基礎とし、漢代における東西文化交渉史まで論述の範囲を広げられた。これ以外に、李零氏（北京大學中文系教授）『申徒狄』研究もこの第1部で報告される予定であったが、来日を実現できなかったのは残念である。

第2日（16日）は、午前10時から、**第二部「古典の伝統と変容」**〔司会 平田（5）～（6）/釜谷武志氏（7）～（8）〕として4つの報告がおこなわれた。いずれも、「古典」として公認され権威づけられた伝統が、歴史のなかでどのように解釈され、応用されていくか

を検討した報告である。最初の2報告は、それぞれ中国学術史の重要な転換期にあたる漢代・南宋をとりあげた。まず(5)釜谷武志氏「漢代における古典の成立と文学の変容」は、前漢と後漢の文学の違いにつき、儒学の經典の成立および普及との関係を指摘、前漢・後漢の接点となる揚雄(前53~後18)の作品に見られる古典の引用や語彙の使用が学問・学習と切り離せないこと、先行作品を意識して創作する傾向が後漢に入って定着することを指摘した。続いて(6)齋藤希史氏(国文学研究資料館助教授)「讀詩之法 朱熹における古典の内在化」は、南宋の朱熹(1130~1200)『詩集伝』における古典解釈の特徴をとりあげ、その根底に古典本文を虚心に音読する行為を通して原典の本来の意味へと到達できるという意識が存在し、「詩小序」の否定と「叶韻」説の採用はいずれもそこから出たことを述べた。

第二部後半の報告は、元明以降の社会において古典が民間や私的空間に入ってからの変貌をとりあげている。(7)金文京氏(京都大学人文科学研究所教授)「規範としての古典とその日常の変容 元代日用類書『事林広記』所引法令考」は、中国人の行動を強く規制した「十悪」の定義が、唐代刑法解説書『唐律疏議』と南宋末の百科事典『事林広記』とでどのように異なるかを比較し、後者が民間で流布したヴァージョンを踏まえることを指摘し、民間で再解釈された法令が再び公式の法令へ影響を与えていく可能性を示唆した。

(8)呉承学氏(中山大学中文系教授)「文字遊戯と漢字の詩学 『詩牌譜』研究」は、明代の文人の間で広く行われた遊戯「酒令」のルールブックである『詩牌譜』につき、版本・遊戯規則を具体的に紹介するとともに、『詩牌譜』に定められたゲームの数々が漢字という文字体系と切り離せないものであることを論じたものである。

昼食休憩後、「第三部 古典と非古典 再生産過程での相互作用」[司会 平田]の報告討論が行われた。権威として定着した「古典」は、種々の回路を通じて演劇・小説・歌謡など「非古典」世界へ浸透していく。逆に「非古典」世界は、それぞれの時代において産み出される古典注釈や古典語作品創作に干渉していくであろう。この双方向性をもった作用は、「古典」の継承につき考える場合、常に念頭におかれねばならない。

(9)王瓊玲氏(中央研究院中国文哲研究所副研究員)「明末清初才子佳人劇の“情”観における理性的内実、およびその審美的構想」は、明代末から清代初期にかけての才子佳人劇に、それ以前に流行していた“主情”主義から“情”と“理”の調和へという転換が認めら

れることを、孟称舜・金聖嘆・李漁を例に論じ、このような思潮を背景としたプロット構成の変化につき具体的に指摘した。(10)松家裕子氏(追手門学院大学文学部助教授)「詩人の聴覚世界 袁宏道の詩における古典と非古典」は、明代公安派の詩人袁宏道(1568~1610)の古典詩の作風・詩学理論に、彼が耳にして育った俗曲・民間歌謡などが少なからぬ影響を与えた可能性から、視覚世界(読書)と聴覚世界の交錯に注意すべきことへと説き及んだものである。

「第四部 近代への転換期における古典・教育」[司会 平田(11)~(12)/金文京氏(13)~(14)]では、中国が西洋の脅威を知った19~20世紀において、伝統的古典学・古典教育がどのように変貌せざるを得なかったかをとりあげた。(11)葛兆光氏(清華大学中文系教授)「状況変化に対応する資源としての経学 晚清の中国古典に対する再解釈(一)」は、19世紀後半、西洋の新しい知識体系に触れた中国が、正統的イデオロギーである儒学古典の解釈(経学)という形態で反応を示した結果、古典研究の実証学化が進行、結果的に原經典は史料となりはて、本来の神聖性・絶対的權威性を失っていくという過程について述べている。(12)夏曉虹氏(北京大学中文系教授・東京大学人文社会系研究科外国人教師)「晚清の女性教育における満漢対立 惠興自殺事件を読む」は、1905年、満洲人女性惠興が女学校を開設し、その運営に失敗して自殺するまでの経緯を調べあげ、さらに惠興自殺事件に対して北中国・南中国が示した反応の違いを指摘、そこから清代における満洲族・漢族の民族対立感情を読み解いた。(13)陳平原氏(北京大学中文系教授)「伝統的書院の近代的転換 無錫国専を中心に」は、中国の伝統的な私設教育機関「書院」が、西洋化・近代化の中でどのように転換していったかを、唐文治により1920年に創設された無錫国学専修館(のち改称)を例に、無錫という土地の文化的・経済的状况、あるいは唐文治のめざした教育方法などと関連させつつ考察したものである。(14)平田「光緒二十四年の古文」は、1898年に、戊戌変法が打ち出した八股文廃止の方針、馬建忠『馬氏文通』、嚴復訳『天演論』が集中することを言い、この年こそ清朝欽定でない思想と文体が教育を通じて拡散を始める転換点であることを指摘した。

講演原稿・論文は、全文を『文化的制度としての中国古典 会議予稿集』(A4判278ページ)のかたちにとまとめ、シンポジウム参加者全員に配布した。その際、中国からの講演原稿・論文はすべて日本語に全訳し、中国学を専門としない研究者にも参照していただける

よう配慮した。以上の日本語論文・日本語訳文は、改訂の上で集成し、本特定領域研究総括班の叢書『古典学の現在Ⅱ』として刊行される。

多忙にもかかわらず講演・報告・通訳・司会を快く引き受けてくださった上記各位の好意あるご協力なしに、本シンポジウムを企画することはとうていできなかった。特に、平田の配慮が不十分であったため開催日程を当初計画の2000年1月から半年間延期したにもかかわらず、中国側発表者の全員が日程調整に応じてくださったのはありがたいことである。シンポジウムのために各地から集まって討論を盛り上げられた参加者のかたがた、企画の相談にのってくださった葛兆光氏・陳平原氏・胡曉真氏（中央研究院中国文哲研究所）・釜谷武志氏、論文翻訳を分担された濱田麻矢氏（神戸大学文学部助教授）、限られた時間の中で中国側

論文の日本語訳作業にあたったのみならず、シンポジウム関連の雑務をこなしてくれた京都大学文学研究科中国語学中国文学研究室の大学院生諸君、秘書の今井美樹さんにも感謝せねばならない。開催に要した経費は、平田の計画研究「中国における制度と古典」によってほとんどを支弁したが、京大以文会からも講演会・シンポジウム等補助金をいただくことができた。

残念だったのは、平田の不手際と思いがけない事情とが重なって李零氏が日本入国ビザを取得できず、報告論文まで提出しておられたにもかかわらず不参加となったことである。本年10月31日の京都大学人文科学研究所における李零氏の講演「“三閭大夫”考 兼論楚國公族の興衰」は、本シンポジウムの補遺という性質をあわせもつものであることを附記しておく。

（A04「古典の世界像」班）

